

## 特集 「消化器内科診療の進歩2022～未来に向けて～」

### 巻 頭 言

京都府立医科大学大学院医学研究科

消化器内科学

伊 藤 義 人



私が本学の消化器内科学を担当するようになり、早くも10年目を迎えました。その間、内科系・外科系の諸部門と同様、医療の一分野としての消化器内科診療も消化器病学（消化管、肝臓、胆膵）の日進月歩の進化と相まって大きな変貌を遂げました。その要因としては、従来の疾患概念がevidenceに基づいて整理されたこと、日本における消化器病治療の均てん化を求める学会レベルでの動きに後押しされ疾患別の診療ガイドラインが整備されたこと、難病と認識されている疾患を中心に有用性の高い新たな診療機器や新規薬物が次々と実臨床へ投入されたことなどが挙げられます。

肝臓分野ではウイルス性肝炎に対する新規の経口薬が次々と登場し非代償期の肝硬変に対する治療まで行われるようになりました。肝硬変の栄養・薬物療法では個別治療が可能となり、肝がんの薬物療法は確実に生命予後改善に貢献しています。今後、代謝の中樞臓器である肝臓のcommon diseaseである非アルコール性脂肪性肝疾患診療は、内科全体を俯瞰する視点からの対応が求められると考えています。

消化管分野では診療機器の進歩が著しく、全消化管が検査対象となるとともに早期がんに対するより侵襲の少ない内視鏡検査・治療が展開され、上部・下部消化管内視鏡検査が検診レベルでも広がりつつあります。消化管は人体最大の免疫臓器であるとともに全身の多くの疾患の病態に関わる腸内細菌を擁しています。難治性疾患である炎症性腸疾患の薬物療法は炎症のシグナルのキーとなる分子への介入が治療の進歩

に繋がり、内視鏡所見による詳細な病態の把握が試みられています。

胆膵分野では超音波内視鏡を応用した診断・治療手技とスパイグラスデジタル内視鏡が従来の診断と治療を大きく塗り替えつつあります。現在、胆膵分野の悪性腫瘍の予後は良くありませんが、臨床の現場でより早期にがんを診断するための研究が進められており、診療機器のみならずがんゲノム医療からも診療のmodalityの向上が今後期待されます。

これからの消化器内科診療においては従来から進められている各臓器固有の疾患に対する種々の病態に応じた専門的な治療をグレードアップさせることがまず必要です。さらに、全身臓器との臓器相関ネットワークや消化器臓器間の相関関係の解析も診療に活かされることになるでしょう。現在、不幸にしてがんにより命を奪われる患者さんの多くが消化器がんに起因することを考慮すると、臓器横断的にがんゲノム医療に対する知識と経験を蓄積する医師を数多く養成することも教室の重要な課題となっています。未来に向けて消化器診療が取り組むべき課題は膨大であり、そのend pointはどなたにも明示できないと思われます。今回の特集「消化器内科診療の進歩2022～未来に向けて」は現教室の第一線で診療に携わっている若手・中堅の先生に、現在、臨床で取り組んでいる課題を中心に執筆依頼させていただきました。読者の皆様にとって消化器診療の方向性のご理解の一助となればありがたいと考えております。

